タイ語の「sǎmnuan」の定義について

―日本語の「慣用句」との対応から―

チャンタラチャムノング・セックサン

0. はじめに

タイ語で日本語の「慣用句」にあたるものに「sǎmnuan」がある。「sǎmnuan」は英語のidiomの訳語としても用いられるもので、多くの場合、日本語の「慣用句」も「sǎmnuan」として理解される。

日本語の慣用句には多くの先行研究がある一方で、タイ語の「sǎmnuan」に関する研究は多いとはいえないのが現状である。タイ語の「sǎmnuan」は、日常的に使われる語であるが、一方で学術的に定まった定義がないように思われるのも研究の手薄さゆえといえるであろう。また、日本語の慣用句の対照研究は、日英・日中・日韓の対照が多く、タイ語との対照研究ではノッパラット（1997）やサイソンブーン（2010）などが見られるが、量的に十分な研究の蓄積があるとはいいがたいものと思われる。日本語の慣用句とタイ語の「sǎmnuan」の対照は、両言語の研究の上で大いに望まれるところであると考えられるものの、そのためには、タイ語の「sǎmnuan」についての研究が整備されなければならないであろう。

本稿は、まず、日本語の慣用句とタイ語の「sǎmnuan」の概念の異同を整理し、そこからタイ語の「sǎmnuan」の特徴を明らかにする概念規定を提案することを目的とする。なお、筆者は、日本語の「慣用句」との対応からタイ語の「sǎmnuan」の意義ないしは概念を明らかにすることは、タイ語の「sǎmnuan」を研究しようとする際だけでなく、日本語の「慣用句」を学ぼうとするタイ語母語話者にも役立つものと考えている。

1．先行研究

日本語の慣用句とタイ語の「sǎmnuan」の対照研究としては、ノッパラット（1997）やサイソンブーン（2010）が挙げられる。ノッパラット（1997）は、日本語の「口」を含む慣用句とタイ語の「paàk（口）」を含む「sǎmnuan」を対照し、いずれも「話す･言う」、「話さない･言わない」、「言う態度」、「言い方」を表わすものであると述べている。サイソンブーン（2010）は、意味拡張の観点から身体部位を表わす慣用表現を対照し、身体部位を表わす表現の意味拡張の分類、比喩的な意味拡張と文法化、精神活動を表わす日本語とタイ語の表現について考察している。しかし、ノッパラット（1997）とサイソンブーン（2010）は、いずれも研究の基盤となるタイ語の「sǎmnuan」の定義を明らかにしていない。

タイ語の「sǎmnuan」についての標準的な著作であるKhun wichitmatra sanga kanchanakphan（1970）では、「sǎmnuan」について、(1)策略的な話しことばである、(2)直接的でない（間接的な）話し方である、(3)特別な意味を持つものであるという３点を条件として挙げている。この説明は、後のSeehaamphai（2002）やLamsamut（2010）でも踏襲されている。なお、Seehaamphai（2002）では、「sǎmnuan」の表わす特別な意味が比喩的な意味であるとした上で、(4)単語から成り立つものである、(5)句の構成は文法的に正しくないが慣用的に認められたものであるという点を付け加えている。一方、日本語の慣用句の研究では、さまざまな慣用句の定義が提案されている。

森田（1966）では、文法と語彙を認識しているだけでは理解または処理できない表現が慣用句であると述べられている。

白石（1966）は、慣用句は全体としてひとまとまりの意味を持ち、その意味は構成要素の意味を（文法的・理論的に）重ね合わせただけでは引き出せないものであるという。そのため、一言語に習熟しないと理解することができないものである。

宮地（1974）は、単語が二つ以上強固に結合した連続体で、全体で定まった意味を持つ表現を慣用句であるとしている。また、意味の上では、成語的

な内容を含むものや比較的はっきりした比喩的意味を表わすものがあると述べている。

高木（1978）は、二つ以上の単語から成り立つ表現という点では慣用句も連語も同じだとした上で、慣用句は連語とは異なる固定化した構成物であると述べている。慣用句は、句全体が単語相当であり、その構成要素である単語の語彙的な意味と単語間の連語論的な法則からでは説明できない意味を持つという。

伊藤（1989）は、慣用句とは、語と同じような機能を持ち、統語的・意味的な統一体を形成する少なくとも２つ以上の語の結合であると述べている。

中川（2004）は、慣用句は複数の語からなる言語表現形式であるとし、連語句が習慣的に固定されて一定の意味を担って用いられたものであると述べている。

松本（2006）は、慣用句を形式的に２つ以上の単語からなりたつ名づけの単位であると述べ、内容的には単語に近いものだと指摘している

石田（2011）は、慣用句は複数の語から構成されている表現であり、構成語間の結びつきが強いという特性を持っていると述べている。

２．慣用句の定義と「sǎmnuan」の定義

前章で述べた慣用句と「sǎmnuan」の定義を、それぞれの特徴の記述に基づいて整理すると表のようになる。

	特徴の記述	日本語の慣用句	タイ語の「sǎmnuan」
形態論的な面	２つ以上の単語から成る	○	×
	全体で一つの単位をなす	○	○
統語論的な面	文法的でない結合が見られる	○	○
	結合が強固で影響されにくい	○	○

意味論的な面	一定の特別な意味を担っている	○	○
	理解するのに特別な知識がいる	○	○
	語義の総和と異なる意味を持つ	○	○
語用論的な面	比喩的な意味を表わしうる	○	○
	策略的な話しことばである	×	○
	直接的でない話し方である	×	○

○は記述が当てはまること、×は記述が当てはまらないことを示す。

以上の整理から、日本語の慣用句とタイ語の「sǎmnuan」では、文法的に特殊なふるまいが見られることや個々の要素に還元されない意味を表わすという点では共通しているが、日本語の慣用句では必ず複数の語から構成されることが要件とされ、タイ語の「sǎmnuan」では話者の意図を反映したレトリカルな表現であることが強調される点で違いが見られることがわかる。

3．日本語の「慣用句」とタイ語の「sǎmnuan」の対照

日本語の慣用句の定義に含まれているが、タイ語の「sǎmnuan」に見られない特徴に句が構成される単語の数がある。日本語の慣用句は、一般に、連語と同じく形式的には二つ以上の単語から成り立つものと考えられている。例えば、日本語の「気が立つ」という慣用句は「緊張が続いていらいらする。また、強い刺激を受けて興奮する」という意味である。これは、〔名詞＋(が)＋動詞〕の形であり、単語を単位としても文節を単位としても２つ以上の構成要素から成り立っていると見ることができる。それに対して、タイ語の「sǎmnuan」は、Khun wichitmatra sanga kanchanakphan (1970)、Seehaamphai (2002)、Lamsamut (2010) が、それぞれ「語から構成された」とだけ述べているように、１つ以上の単語から構成されるのが基本である。複数の構成要素からなる「sǎmnuan」も多いが、タイ語の辞典等では１語からなる「sǎmnuan」の例も掲載されている。具体的には、以下のようなものである。

まず、Khun Wichitmatra Sanga Kanchanakphan (1970) では、「sǎmnuan」として「khɔɔ」の例が見られる。「khɔɔ」を直訳すると「のど」という意味

であるが、「sǎmnuan」としては「何かが気に入って味わいを楽しむ／興味を持っている人」という意味を示すのである。「sǎmnuan」の意味では、「khɔɔ paaciŋko」「khɔɔ lâu」「khɔɔ nǎŋ tai」など、状況によって適切な名詞を後接して使われる。ここで、「khɔɔ paaciŋko」は、直訳すると「のど」＋「パチンコ」の意味だが、「sǎmnuan」として「パチンコをすることが好きな人」という意味になる。同様に、「khɔɔ lâu」は、直訳すると「のど」＋「酒」の意味だが、「お酒を飲むことが気に入って味わいを楽しみ人」という意味になり、「khɔɔ nǎŋ tai」は、直訳すると「のど」＋「タイの映画」の意味だが、「映画を見ることが好きで興味を持っている人」という意味になる。次は、「khɔɔ nǎŋ」を用いた文例である。

用例１）

nǎŋ　rɯ̂aŋ　nii　khrai　pen　khɔɔ　nǎŋ　mâi　khuan　phlaât
映画　（代名詞）この　人　である　のど　映画（否定）べき　欠席する
これは、映画好きな人なら見ておくべき映画だ。

宮地（1990）では「khum」の例が見られる。「khum」は、直訳すると「瞥護する、統轄する」という意味であるが、「sǎmnuan」として「先頭に立って配下の者を指図をする／采配を振る」という意味で使われる。次は、「khum」の用例である。

用例２）

tham naâthiî khum baân duulɛɛ nɔ́ŋnɔ́ŋ tɔɔnthiî phɔ́ɔmɛɛ̂ mâi yuù
する　役割　瞥護する 家　面倒を見る 弟たち　時　父母（否定）いる
父母が出かけたとき家の采配を振って弟たちの面倒を見る。

田中（2011）では「thǎi」の例が見られる。「thǎi」は、直訳すると「田畑を掘り返す、土地をすきでたがえす、耕す」という意味であるが、「sǎmnuan」として「お金などをゆすり取る、だまし取る、強引に引き出す」という意味

で使われる。次は「thăi」の用例である。

用例３）

nɔ́ŋchaai maa　thăi　ŋɤn caàk phom penkhráŋpenkhrau

　弟　　来る　耕す　お金　に　僕　　時々

弟は時々僕にお金をゆすりに来る。

Wichian Getprathum（2012）では「fɔɔ˝i」の例が見られる。「fɔɔ˝i」は直訳すると「一般に、細い糸状の物質、繊維」という意味であるが、「sǎmnuan」として「実際よりも大げさに喋る」という意味で使われる。次は、「fɔɔ˝i」の用例である。

用例４）

fɔɔ˝i　kàp　phûan nai ŋaanliáŋ con　lɯɯm　pai　thák　câuphaâp

繊維　と　友達　中　宴会　ほど　忘れる　行く 挨拶する　主催者

主催者に挨拶に行くことを忘れるほど宴会の中で友達とお喋りをした。

以上の例から明らかなように、タイ語の「sǎmnuan」には１語からなるものが存在していると考えられる。これらは日本語の「慣用句」の定義には当たらないが、「sǎmnuan」（タイ語のイディオム）だと認められているものである。１語からなる「sǎmnuan」には俗語的である（レジスターの低い語）という面も見られる。以下にいくつかの例を挙げておく。

「kài」　（直訳：にわとり→「売春婦」）

「sian」　（直訳：威力を持つ神・天使→「物事に巧みなこと」）

「puùt」　（直訳:膨れた、はれあがった→「誰かの秘密を他人に漏らすこと」）

「riît」　（直訳：アイロン、こて、火のし→「権力・脅しで抑圧する、強要する」）

「lia」　（直訳：舌で舐める→「誰かを本心からでなく大袈裟に誉めて、

諂う」)

「suàt」 (直訳：祈る→「物事についてぶつぶつ言う、文句を言う」)

「sên」 (直訳：線、すじ→「つながり、支持者または後ろだて」)

「muŭ」 (直訳：豚→「だまされやすい人」)

タイ語の「sǎmnuan」は、多くが比喩的な意味を持っている。その比喩的な意味は、コミュニケーションにおいて相手に情報を伝達するだけでなく、感情や心情といった話し手の内状を表わすように用いられるものである。例えば、優れた者として褒めたり敬意を払ったりしたいとき、一般的な連語の「kèŋ maâk」を用いてもよい。

用例５)

dèk　sàmǎinii　kèŋ　maâk　glaâ　kít　glaâ　sàdɛɛŋʔɔɔ̀k

若者　最近　上手　とても　勇気　考える　勇気　公開

最近の若者はとても偉い。考えたり意見を述べて公開するのも平気だ。

同じ内容を表現するとき、「yók níu hâi」というタイ語の「sǎmnuan」を使うこともできる。「yók níu hâi」は直訳すると「指を上げてやる」という意味であるが、「sǎmnuan」では「相手の力量や知識などが優れていることを認めて敬意を払う」という意味で使われるもので、日本語の「一目置く」という慣用句と同じ意味であると考えられる。次は、「yók níu hâi」の用例である。

用例６)

dèk　sàmâinii　yók níu hâi　glaâ　kít　glaâ　sàdɛɛŋʔɔɔ̀k

若者　最近　一目置く　勇気　考える　勇気　公開

最近の若者には一目置いている。考えたり意見を述べて公開するのも平気だ。

用例５）と６）を比較したとき、タイ語母語話者では６）の「yók níu hâi」という「sǎmnuan」を用いた文の方が、相手を褒めて敬意を払う気持ちが強いように解釈する。これは、一般の連語より「sǎmnuan」のほうが比喩的な意味を持つ「きれいな言葉」であると考えられるためである。そのため、「sǎmnuan」を用いた文は策略的な話しことばだと考えられるのである。また、「sǎmnuan」は直接的でない間接的な話し方であると解釈される。そのため、一般的な連語を用いるよりも「sǎmnuan」を用いる方が含意が豊かで活き活きとした描写を可能にするものと考えられる。例えば、「pàt khɛ̂ɛŋ pàt khaǎ」は、直訳すると「力を加えて転ばせるように誰かの足を押す」という意味であるが、「sǎmnuan」としては「他人の成功や出世の邪魔をする」という意味を表わす。タイ語母語話者が聞けば、同じ意味の「kɔ̀ɔkuan khàtkhwǎŋ」という連語よりも意味を深く表わすことができる活き活きとした描写だと受けとることができる。

４．まとめと今後の課題

本稿では、日本語の「慣用句」の概念とタイ語の「sǎmnuan」の概念とを照らし合わせて比較した。その過程で、日本語の「慣用句」とタイ語の「sǎmnuan」の特徴の記述を項目ごとに整理した。

日本語の「慣用句」とタイ語の「sǎmnuan」の概念の重要な違いは、構成要素（語）の数に係る条件である。日本語の「慣用句」では必ず複数の構成要素が認められるのに対して、タイ語の「sǎmnuan」では１語からなる単語相当のものも認められる。このような「sǎmnuan」の多くは、俗語的な特徴を持っている。

一方、タイ語の「sǎmnuan」ではレトリカルな表現である側面が強調される。このことは、「慣用句」と「sǎmnuan」の解釈の原理に違いが見られることを示唆しているものと考える。この点については、両言語の文化的な背景など、より広範な視野での対照が求められるであろう。

参考文献

石田プリシラ(2003)「日本語の慣用句研究—慣用句の特性と意味を中心に—」筑波大学博士学位論文.

伊藤眞 (1989)「慣用句の具象性についての一考察」,『筑波大学言語文化論集』51, pp.95-117.

白石大二 (1969)『国語慣用句辞典』東京堂出版.

サイソンブーン,ラダポーン (2010)「身体部位を表す日本語・タイ語の慣用句の対照研究：意味拡張」大阪大学博士学位論文.

高木一彦 (1978) [1974]「慣用句研究のために」, 松本泰丈編著『日本語研究の方法』, pp.95-118, むぎ書房.

中川純子 (2004)「通時的・共通的語意ネットワークにおける慣用句」,『慶応義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』38, pp.77-104.

ガモンティップ,ノッパラット (1997)「日・タイ語の慣用句の対照研究—『顔』・『頭』・『口』を中心に—」筑波大学地域研究科修士論文.

田中寛編著 (2011)『タイ語慣用句拾遺：ことわざ 成語 慣用句にみるタイ語文化の世界』(語学教育フォーラム第23号), 大東文化大学語学教育研究所.

松本泰丈編著 (1978)『日本語研究の方法』むぎ書房.

——— (2006)『連語論と統語論』至文堂.

宮地裕 (1974)「『成句』の二三の用法について」,『季刊文学・語学』74, 全国大学国語国文学会.

——— (1990)『慣用句の意味と用法』明治書院.

森田良行 (1966)「慣用的な言い方」,『講座日本語教育』2, pp61-78, 早稲田大学語学教育研究所.

Khun wichitmatra sanga kanchanakphan (1970)『Sămnuan Thai (タイ語の慣用句)』Ruamsarn Publisher.

Praphasee Seehaamphai (2002)『Wattanatham Thang Phasaa (文化的な言語)』Chulalongkorn University Press.

Trungtaa Lamsamut (2010)「Sămnuan Thai（タイ語の慣用句）」
Rajamangala University of Technology Rattanakosin.
Wichian Getprathum (2012)「Sămnuan Thai（タイ語の慣用句）」Phoosoo
Phathana Publisher.